

【研究ノート】

チベット・アムド地域における 人生儀礼の変化に関する考察 —ワッコル村の事例から—

チオルテンジャブ

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

要 旨

本稿の目的は、チベット・アムド地域すなわち中国青海省黄南藏族自治州に位置する同仁県ワッコル村における人生儀礼の変容について考察することである。

近年チベット・アムド地域では、チベット仏教の復興運動が顕著であり、また、民間信仰の変容も生じている。筆者はこれまで、ワッコル村で最も盛大な収穫儀礼であるルロ祭など年中行事における祭祀儀礼について考察し、現地社会において重要視されている年中行事の細部が変化していることを明らかにしてきた。本稿で示すのは年中行事のみならず、個々人の人生儀礼にも変化が生じていることである。

全体として人生儀礼の変化とその影響については、以下の二点にまとめることができる。

①現地の人生儀礼はチベット仏教復興運動の影響を受けており、儀礼時に提供される料理は殺生を控えた精進料理へと変化し、さらには成人式などにおける装飾品にも変化が生じていること、②儀礼の変容に伴い、これまで周辺のチベット族からは「ドルド」と呼ばれ、政府からは「土族」として認定されて来たワッコル村の人々の意識において、一層チベット族としての民族意識が強くなっていることである。

こうした地域の事例に即して現状を提示し、分析することによって、チベット・アムド地域における文化変容の全貌への理解を深めることができる。

キーワード：チベット、アムド、ワッコル村、人生儀礼、民族アイデンティティ

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1. はじめに | 5.3 成人式 |
| 2. 先行研究と問題の所在 | 5.4 結婚式 |
| 3. 調査地概況 | 5.5 積徳（善行）儀礼 |
| 4. 信仰と宗教の概況 | 5.6 60歳の祝いと80歳の祝い |
| 5. 人生儀礼 | 5.7 葬儀 |
| 5.1 誕生儀礼 | 6. おわりに |
| 5.2 剃髪式 | |

1. はじめに

チベット人は伝統的に自らの居住地域をアムドAmdo、カムkhams、ウツァンdbus gtsang¹⁾という三つ地域（図1）に区分する。それぞれの地域では異なるチベット語方言が話される。自治区西部のラサ・シガツェ方面が「ウツァン」であり、西藏自治区東部のチャムド地区・四川省甘孜藏族自治州・雲南省デチン藏族自治州・青海省玉樹藏族自治州が「カム」である。また、玉樹を除く青海省の藏族自治州と四川省アバ藏

族自治州・甘肅省甘南藏族自治州が「アムド」に当たる。

本稿で取上げるワォッコル村（bod skor sde ba）はアムド・レプコンReb kong³⁾地域にある。村民の母語は通説では中世モンゴル語に由来するといわれ、1950年代の民族識別以降、その母語は土（トゥー）語として分類され、人々は「土族」とされてきた。しかし村民自身はチベット族としての民族的アイデンティティが強く、生活様式も同じアムド・レプコン地域に住むチベッ



図1 三つのチベット地域区分（中国好酷网²⁾より）

ト族と変わらない。しかし、周辺のチベット族からは「ドルド」或いは「ホル」と呼ばれて区別されてきた。

近年の経済発展と観光化政策、チベット仏教復興運動、それに周辺のチベット族との通婚区域の拡大などの要因によりウォッコル村をとりまく状況は大きく変化を遂げつつある。他方、最近、一部の同仁県の土族出身の知識人や高僧らが、村の歴史や民族について語るようになった。これまでの政府の民族識別によるカテゴリーと『地方誌』などに疑問を持ち、それらを批評する書物を書くようになり、チベット族というアイデンティティが強くなっている。例えばウォッコル村出身のハルデン氏の『ウォッコル村ツムパ部族と僧院の歴史』（内部資料2015）、ゴマル村出身の隆務寺僧侶のゲドン氏が著した『ゴマル村の歴史』（中国文史出版社2015）等がある。

本稿は、このような状況下にあるウォッコル村の人生儀礼に焦点を当て、具体的に儀礼の変容を明らかにし、チベット仏教復興運動をはじめとする要因との関係を考察することを目的としている。

以下では、まず、チベットの人生儀礼に関する先行研究を取り上げ、従来の研究動向と問題点を提示する。そして、本調査地の概況について述べ、当地域における信仰と宗教の体系について概観する。その後、本稿の中心となる人々の誕生から死までのそれぞれの人生儀礼とその変容について詳細に記述する。その上で、最後に、人生儀礼の変容と、それに影響を与えた要因とともに全体的視点から捉えて総括したい。

2. 先行研究と問題の所在

チベットの人生儀礼に関する従来の研究は、主に取り上げた人生の各節目に行われる成人式及び結婚式、葬儀などについての民俗学的研究やエッセイ風に記されたものが多い。例えば、成人式と結婚式などについては劉軍君の「成人

式与婚姻規制的建構—青海貴徳蔵族戴天頭の考察」（劉 2015）と白君の「安多蔵族伝統婚姻形成的変遷及成因」（白 2013）、羊錯の「吾屯土族婚姻礼俗述論」（羊 2015）などの中国語論文がある。それ以外には、チベットの鳥葬についての論文と記事が多い。例えば、安世興の「簡論蔵族的喪葬与禁忌」（安 1984）と悠愴の「青海蔵族喪葬文化」（悠 1996）などがある。

また、調査者が聞き取り調査に基づいてまとめた概観的な民族誌的研究がいくつかあるが、時間の経過にしたがって人生儀礼が変化した側面に関する言及はない。従来は、長野禎子が「チベットの現地調査が困難であったこともあり、全容を知ることが可能な民族誌は皆無に近かった」（長野 2008）と述べているような研究状況であった。したがって、チベット文化について断片的に行われてきた過去の研究は、主にインド領のラダックと亡命チベット社会、それにネパールのシェルパ族などのヒマラヤ・チベット文化圏⁴⁾の国や地域においてである。

近年、チベットのボン教と葬儀、ヤンを呼ぶ儀礼などについての研究が行われるようになった。例えば、小野田俊蔵は論文「チベットにおける葬送儀礼」の中で、古くから記述されてきたチベットの葬儀に関する西洋文献を整理しながら、火葬と鳥葬、水葬、土葬の四つの従来の葬儀方法について詳しく記述している（小野田1993）。また、長野は「チベットにおける「ヤンを呼ぶ」儀礼」の中で「g-Yang ‘gugsヤングー」というチベット文化圏の民衆の生活サイクルの節目で頻繁に行われる儀礼に注目し、カトマンズと四川省のボン教寺院の参与観察と儀式書の分析を通してチベット文化圏の各地域でヤングーがどのように行われているかについて述べている（長野2008）。

さらに、服部範子は「ヒマラヤ山岳地帯における人々の生活と一生」の中で、主にヒマラヤ山脈の山岳地帯において、チベット仏教を信じる人々の日々の日常生活や一生に関して民家訪

問の研究方法に基づいて、生活調査や女性の日常生活や生活意識について聞き取り調査を行っている。服部は20世紀以降、チベット文化圏において、チベット仏教を信じる人々の生活が急速に変化しつつある一方で、仏教的精神文化は残っていると述べている。また、調査地のヒマラヤ山脈の山岳地帯においては平均寿命が短く、長寿儀礼をほとんど行わず、輪廻転生を信じて祖先崇拜もせず、チベット仏教が彼らの精神的な拠り所となり維持・存続していることを指摘している（服部 2011: 200）。

また、石井溥は「人生儀礼の比較研究：ボン教徒の人生儀礼と周辺諸民族の人生儀礼」の中で、インドとネパール、日本などの人生儀礼における宗教的意味合いの比較研究を行った。石井は主に1997年から1998年にかけて断続的にネパールのカトマンズ盆地において、難民としてチベットからカトマンズ盆地に定着した一人の男性インフォーマントを対象に聞き取り調査を行っている。「ボン教徒の間では、死の儀礼（葬儀、法事）では宗教色は濃い、それ以外（主に誕生と結婚）では極めて薄い。それに対し、ヒンドゥー社会、ネワール社会（ヒンドゥー教、仏教）では人生儀礼は全体として宗教的である」（石井 2009: 110）と指摘している。

また、仏教の影響について宮本万里は「現代ブータンにおける屠畜と仏教一殺生戒・肉食・放生からみる「屠畜人」の現在について」の中で、「仏教国であるブータンでは、殺生をしないということは仏教教義の根幹をなす教えであり、殺生は現世における最大の罪となる…（中略）また、仏教僧たちによって近年盛んに行われている大規模な灌頂儀礼や、古くからの養豚の習慣の放棄を促す説法は、屠畜者に対する社会的なステイグマを一層高めている（宮本 2014: 75）」と述べている。

以上のようにチベットの人生儀礼や仏教の影響などに関する研究は、主にヒマラヤ圏のインドやネパール、ブータンなどに関するもので、

チベット本土における人生儀礼に関する研究はあるものの、民俗学的研究やエッセイにとどまっている。

本稿では現在チベット・アムド地域における伝統的な人生儀礼と近年の変化について同地域出身者である筆者の参与観察と聞き取り調査に基づき、その変容を評述する。それを変容に影響を与えた要因とともに考察することを通し、当該地域でチベット仏教を信仰する「土語」を母語とする人々の社会の最新動態を描出する。

3. 調査地概況

同仁県（チベット語でརེབ་ཀོང་Reb kongレブコン・熱貢）は青海省の東部に位置し、チベット文化圏の中でも東端に相当する。同仁県（図2）は青海省の省都である西寧市の真南にある。黄南チベット族自治州の州政府所在地でもあり、総面積は3,275平方キロメートルである。東は甘粛省のツァンチュ（夏河）県、南は同州の澤庫県、西は海南チベット自治州のチュカ（貴徳）県、北は同州チェンツァ（尖札）県、海東地区の化隆回族自治州、循化サラル族自治県などに隣接している。

同仁県は2つの鎮と10の郷に分けられる。その下に4の「社区（居住地）」と72の行政村がある。総世帯は20,877戸、総人口は79,115人である。そのうち遊牧民と農民は合わせて11,378戸で60,229人である。チベット族の他に漢族、回族、土族、サラル族、保安（ボウナン）族、モンゴル族などの多民族が集住しているが、チベット族は73%を占めている（黄南蔵族自治州概況編写組 2008: 61）。

本稿の調査対象であるウォッコル村（図2）は同仁県の北部に位置し、県政府所在地の隆務（ロンウォ）鎮から15キロメートル離れている⁵⁾。行政単位としては同仁県の保安鎮に属する。保安鎮の総人口は9,609人（2001年）程度で、そのうちチベット族が64%を占めている。チベット族の他に漢族、土族、回族などが住んでいる。こ



図2 黄南藏族自治州同仁県とウォッコル村

の地域では、村人の多くが農業で生計をたて、農閑期には出稼ぎにでる人が多い。

1950年代に中華人民共和国政府による民族識別工作が行われた。その際、ウォッコル村と同仁県の年都呼郷のニエントフ (gnyan thog年都呼) 村及びガセル (rka gsar尕沙日) 村、ゴマル (sgo dmar郭麻日) 村、隆務 (rong bo) 鎮のツァンゲシヨン (seng ge gshong吾屯村) とジャツァンマ (rgya srang ma 加查麻村) の従来「ドルド dor rdo」と呼ばれてきた人々、その他に青海省の互助県と楽都県、大通県、甘肅省などに点在している中世モンゴル語に由来する言語を話す民族集団が一つの民族として識別され、「土族」として登録された。

同仁県の土族と青海省の別の県に点在している土族の言葉は同じくモンゴル語系統に属すると言語学者の研究で言われているが、互いの土族語は通じない。彼らの間に民族識別の4つのメルクマール⁶⁾の1つである「同一のアイデンティティ」は存在しない。ウォッコル村の人々はル

ロ祭などの伝統的行事を行う際、周辺のチベット族からはウォッコル村をマパ7つ (旧時代のマパ千戸に相当) のチベット族の村 smad pa sde bdun⁷⁾ と捉えているものの、上記の他の土族村はジャセゼシユ (rgya khre tse bzhi) 漢四屯あるいは四寨子村すなわち別の村落共同体として捉えてきた。

宗教は同仁地域を含めてアムドのほとんどのチベット族がチベット仏教ゲルク派を信仰しているが、仏教伝来以前からの宗教であるボン教 Bon poや、チベット仏教ニンマ派 (古派) sNying maの信者もいる。隆務の町の中には僧侶600人あまりを有するチベット仏教ゲルク派の名刹一ロンウォ・ゴンパ (隆務寺) がある。

現在のウォッコル村は253戸余、約1,350人の規模である。また、古くから仏画絵師とチベット伝統医の多い村として有名である。宗教的にはチベット仏教のゲルク派と土着神を信仰しており、母語は土語であるが、村民の多くはチベット語と中国語 (青海方言) も話す。

現在、村民の戸籍上の民族登録は、土族とチベット族の両方が見られる。例えば、2015年の公安局の登録では、土族は427人、チベット族は289人である⁸⁾。1950年代の「民族識別工作」以後、中国政府は1958年に「中華人民共和国戸籍登録条例」を公布し、住民の戸籍登録を行い、そこに民族的帰属も記されることになった。1985年9月6日に政府が「中華人民共和国居民身分証」を発行 (『黄南州州誌』1999: 907) するようになり、それを契機として、ウォッコル村の一部の僧侶や学生などが自分の意思で民族変更願を公安に提出し、変更が可能になった。一部の村民は1990年代後半に政府が「戸籍制度改革」を行った際、民族をチベット族に変更したのである。そのため、現在、同じ家族であるにもかかわらず、民族的登録がそれぞれ別であるケースが見られる。後述するように、村人は日々の生活においてチベット族という意識を強く持っているが、政府からは今も「土族の村」として認識されて

おり、村の広場には「政府が援助した土族村(2014年)」という記念碑が置かれている。このように、ウォッコル村では、地方行政レベルの民族識別と、現地住民の民族登録、さらに民族意識との間に認識のずれがあり、かなり複雑な状況が見られる。

経済面では、中国は1978年末の改革開放政策実施以来、閉鎖的な経済からグローバル経済に急速に転換した。それ以来30年以上経ち、青海省における市場経済の急速な発展(表1)に伴う様々な伝統文化の変化が生じている。

ウォッコル村で起きた経済開発や観光化などについては筆者の別の論文(2016)でも論じてきた。

当地域を含む西部では2000年3月に中国西部大開発戦略が実施され、当時、レプコン地域は中国の中で最も貧しい県の一つとして認定されたが、中国政府の第十一次五ヶ年計画のもと青海省を含め西部の辺境地域では、自動車道路の建

設による交通網の整備により、辺鄙な村や山中の寺院まで車が進入できるようになった。特に2006年7月に青海チベット鉄道が開通したため、青海省を訪れる観光客が急増した。

他方、地方の文化政策として2001年8月に第一次「レプコン芸術祭」をレプコン(同仁県)の中心地である隆務鎮で開催し、それを契機にレプコン文化をアピールし、観光業を発展させようとする努力が始まった。また、2006年になると「レプコン芸術」は中国の第一次「非物質文化遺産」に認定された。そのため、黄南州人民政府は、2006年から「文化観光業で収入を増やし、地方経済を再生する」というスローガンを打ち出した(喬旦加布 2016: 203-223)。

2000年以来、上記のような国や地方政府の経済開発と観光化政策の実施により、ウォッコル村では出稼ぎに出る人が増え、薬草販売や仏画の制作と販売により村人の収入が増えている。

表1 年表

1949年10月1日	中華人民共和国成立
1950年1月1日	青海省人民政府成立
1950年代	民族識別工作を実施
1953年	黄南藏族自治州政府、同仁県政府の設立
1965～1975年	文化大革命期「伝統」を迷信、「宗教」を阿片と批判し、すべての宗教活動を禁じた
1978年	中共十三中全会が開かれ、鄧小平が「改革開放の政策」を取り上げる
1980年代以降	改革開放政策の実施と、禁じられた「伝統」の復旧、市場経済の導入、インフラの整備、人の移動自由化。
1990年代以降	中国の「少数民族」居住地区の文化復興と観光化を実施
1994年	同仁県は中国で99の「中国歴史文化名城」の一つに指定される
2000年	西部大開発を実施し、急速な経済発展と観光地化による僧院の対外公開 これにより社会と儀礼の変容
2001年8月	第一次「レプコン芸術祭」を開催し、観光業発展を企図し同仁県政府がレプコン文化をアピールする
2001年	「三江源自然保護区」政策の実施により遊牧民の定住化
2006年	青海チベット鉄道の開通により観光業が急速に発展、人の移動が活発化
2006年6月	レプコン芸術を中国の第一次「国家指定非物質文化遺産」に定められる
2009年9月	レプコン芸術をユネスコの「世界無形文化遺産」に登録

註：主に2008『黄南藏族自治州概況』などを参考し、筆者が作成

4. 信仰と宗教の概況

本稿ではチベット・アムド地域の人々の儀礼祭祀や人生儀礼を扱うために、ここで当地域の信仰と宗教の歴史と概要を述べる。

一般的にチベットというと、ほとんどの人は「チベット仏教」と関連付けるが、7世紀にインドから仏教がチベットに伝来する前に、ボン教やムチ（人間の法）mi chosと呼ばれたチベットの多くの山々に存在する数えきれない山神に対する土着信仰があった。その後、古代吐蕃王朝の8世紀、ティソン・デツェン王がチベット仏教を国教に指定し、レプコン地域を含む全チベット地域で仏教信仰が普及するようになった。吐蕃王国が崩壊すると、仏教教団各派が各地に勃興した。アムドのレプコン地域でもチベット仏教のニンマ派、サキヤ派、カギユ派及びゲルク派などの宗派が流入し、ロンウォ寺を中心に36のゲルク派の属寺が建立された。17-18世紀ごろにレプコンでは数多くのゲルク派の寺院が建てられ、他宗派の寺院でも主流派のゲルク派に改

宗するケースが多々見られた。

現在でもレプコン地方ではウォッコル村を含むほとんどの村人はチベット仏教ゲルク派の信者であるが、ボン教とニンマ派の僧院とその信者も少なくない。以下の図3に示したように、ウォッコル村には、仏教ゲルク派の僧院と土着神をまつる廟（dmag dpon khang）、ニンマパ snying ma pa（古派）のンガカン（sngags khang）真言堂などの宗教施設が併存している。土着神の廟の中でも規模が大きいのは、マホンカン廟である。

以下の表2に示したように、年中行事の中にも民間信仰とチベット仏教の両方の要素が混在している現状がみて取れる。

ほとんどの村人、特に年配者は、毎日のように朝早くからこれらの宗教施設へサン（供物）を持参し、五体投地の礼拝をおこなう。これは彼らにとって重要な宗教実践で、日常生活の中で欠かせない一部になっている。特に祝日や吉日には多い。これらの宗教施設には毎朝、供養

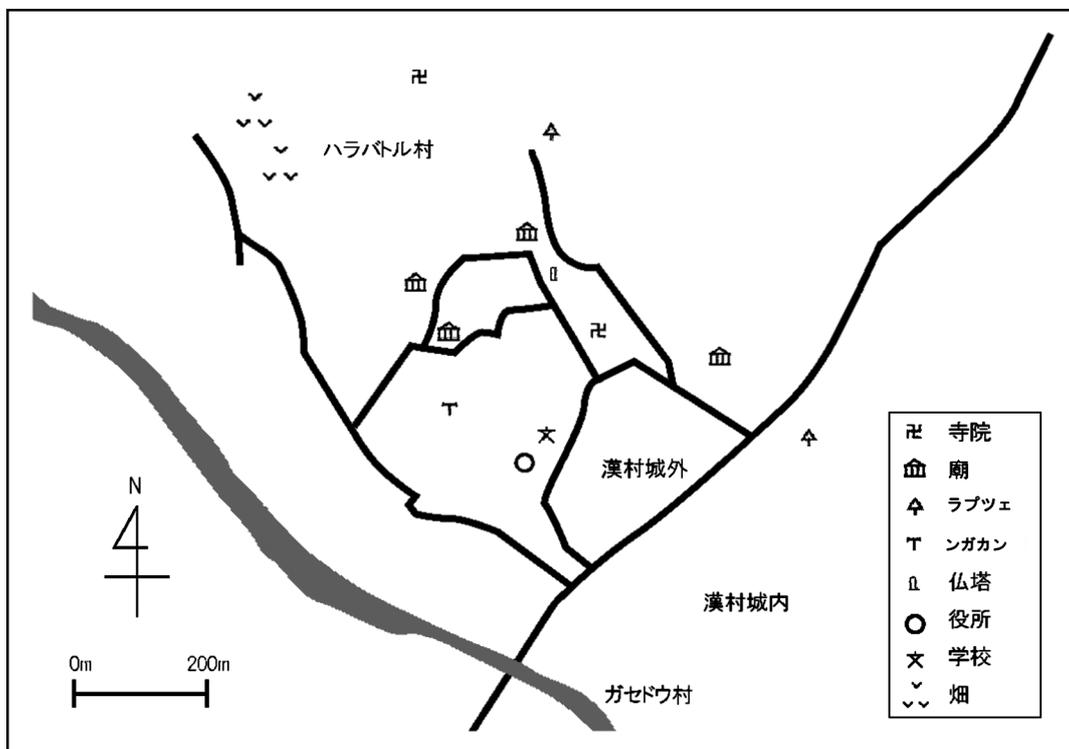


図3 ウォッコル村の主な施設

表2 年間行事

旧暦	1/1	1/2	1/2～7	1/8	1/11～16	1/15	3/5	4/10～15	5/5	5/15	6/17～24	8/15	9月～10月	11月上旬	11月	12/30				
年中行事	春節	廟の読経	80才寿命祝日	仏塔巡礼	祈願大法会	春節最終	読経	釈迦誕生日	読経巡礼	ラッブセ	ルロ祭	中秋節	ソチ善行会	読経会	冬の祭祀	大晦				
場所	各家	二郎神廟	主催者の家	レブコン仏塔	隆務寺	マホンカン廟	村の僧院	村の僧院	村の僧院と畑	村の後山	マホンカン廟	各家	村の僧院	ンガカン(摩尼堂)	指名された家	各家と墓地				
宗教属性																				
農事暦	農閑期					農繁期					麦の収穫					農閑期				
参加の度合い	村人全員	僧侶	村人全員	各家代表	年寄り中心ほぼ全員	村人全員	僧侶	僧侶と年寄り	僧侶と村人	村人と僧侶	チャーマン中心に村人全員	年寄り中心	僧侶中心に村人全員	僧侶と年寄り中心	チャーマンと村人	村人全員				

チベット仏教 民間信仰 民間信仰とチベット仏教の併存

と読経を行うガンドンパー bskang 'don pa という管理人がいる。僧院の管理は必ず僧侶が行い、マホンカン廟の場合は還俗者或いは読経できる長老が廟を管理している。管理人の任期は一年間で、それぞれ僧院の僧侶あるいは村人の中で、輪番交代で務める。ンガカンの摩尼堂の場合は特定の管理人がいないため、掃除と供養などを各家が日替わり輪番制で担当する。村人はこれらのすべての宗教施設で奉られている土着の山神でも、チベット仏教の古い宗派の神でも、すべての神々を同じく、仏教の神々と捉え、礼拝を行う。

5. 人生儀礼

本節では、2013年から2015年までのフィールド調査で得られた現地での聞き取り調査の結果を中心に、ウォツコル村における人生儀礼の諸相と変容について記述する。村人の人生儀礼は、(1) 誕生儀礼、(2) 剃髪儀礼、(3) 成人式、(4) 結婚式、(5) 積徳儀礼、(6) 長寿儀礼、(7) 葬送儀礼に分けられる。これらを人々の年齢の推

移とともに示したのは以下の表3である。

この表で示すように、各節目で行う人生儀礼には土族語とチベット語の呼称がある。特にチベット仏教的色彩の濃い「ソチ」及び「レイトン」、「キャトン」の儀礼名称は、土族語でもチベット語の名称が用いられる。積徳儀礼は好ましい転生のために、死ぬ前に現世において必ず行う儀礼で、チベット語で「チchos」或いは「ゲワdge ba」と言う。本文で紹介する積徳儀礼及び60歳と80歳の長寿儀礼は、チベットでも特にアムド地域だけで行われる儀礼である。一方、ほかの人生儀礼を指す名称は、土族語とチベット語でそれぞれ、異なる名称がある。剃髪儀礼の場合は、土族語の「ヌキャ」とチベット語の「キャトン」の「キャ」は同じくチベット語語源で(頭髮の意味)、チベット語由来である。儀礼の実行場所については、積徳儀礼は僧院で行うが、それ以外は自宅を中心に行う。以下の人生儀礼に関する記述ではまず伝統的儀礼について述べ、その後で変化について言及する。

表3 主な人生儀礼

	誕生儀礼	剃髪式	成人式	結婚式	積徳儀礼	60歳の年祝い	80歳の年祝い	葬儀
土族語名称 ⁹⁾	ツウラ	ヌキヤ	トルンジョ ジュ	ウイル	ソンチ	レイトン	キヤトン	カルマ
チベット名称	tsas ston	(ヌキヤ) キヤトン skra ston	キャパパ skra phab pa	ニェントン gnyen ston	ソンチ gson chos	レイトン re ston	キヤトン gya ston	デイチョ 'das mchod
宗教的要素	民間宗教と仏教	民間宗教と仏教	民間宗教と仏教	民間宗教と仏教	仏教	仏教	仏教	民間宗教と仏教
参加者	親族	親族	親族	親族	村人全員	村人全員	村人全員	村人全員
時期	随時	生後最初の4月11日	大晦日	大晦日	農閑期の秋から冬	正月2日～8日	正月2日～8日	死後3日以内
実施年齢	誕生から一ヶ月	1歳以内	17歳前後	18歳～30代	50代	60歳、61歳	80歳、81歳	亡くなった時点
実行の場所	自宅	自宅	自宅	自宅 レストラン	村の僧院	自宅、廟の 広場	自宅、廟の 広場	自宅から墓地

5.1 誕生儀礼 (ツイトン)

子供の出産前後と出産後の一ヶ月間は、妊婦と子供の生命力が弱まっているという考えから、子供を丈夫に育てるために必要とされる一連の儀礼がある。それは①子授け祈願と②出産儀礼、③命名、④満月祝いの4つに分けられる。

①子授け祈願

まず、結婚後、妻が妊娠しない場合、或いは男の子が欲しい場合は、子宝を授かりたいと神仏に祈る。ウォッコル村を含むほとんどのチベット仏教を信仰する村々では、僧院や廟に出向き、主に仏教の吉祥天とターラ菩薩等の菩薩とその護法神、地域の山神に祈る。女性は転生ラマなどの高僧からターラ菩薩の護符を貰い受け、身に付ける。また、日常的に僧院へ巡礼に行ったり、家事をしながらターラ菩薩の真言を唱えて祈る。特にウォッコル村の場合は、毎朝、山神をまつるアニ・ダルジャ廟やアニ・マゴン廟に供物を持って行き、地域の山神に祈る。また、冬のフコン祭の時などに子宝を授かる儀礼(写真1)を行い、山神が降臨したハワ $lha\ ba$ と呼ばれる宗教

的職能者(シャーマン)に対して子授け祈願のお願いをする。

妊娠がわかるとその家族は毎日、僧院や廟などの宗教施設へサン $bsang$ (供物)を持って行き、供養する。妊婦はその行動や飲食に注意し、来客を断るなど多くの禁忌に気を配る。例えば、妊娠中には腐ったもの及び野生動物の肉、生の肉などを控える。これらを食べると、後から「男の子として産まれるはずだったのに、母胎が穢されたため、胎児の体が女の子になってしまった」と言われることがある。いよいよ出産の前になると、家族全員が家でユルハシユダフ $yul\ lha\ gzhi\ bdag$ (土地神)や仏教のチキョンソンマ $chos\ skyong\ srung\ ma$ (護法神)へ祈る。

以上が村の伝統的な儀礼行為である。子授け祈願など一部は、現在でも伝統が未だに続いている。

例えば、ウォッコル村の39歳の(2015年当時)Yは、次のように語った。

「結婚後6年間妊娠できずにいた。そこで夫とともに各地の有名な僧院を訪れ、転生ラマからターラ菩薩の護符などを貰い、毎日のようにター

ラ真言を唱えた。また、病院の診査も受け、漢方薬も貰ったが、あまり効果が見られなかった。結局、2006年の冬のフコン祭の時、ハワの子授け祈願を受け、このテンジュンを妊娠した。この子は正に神様から貰った子だ」

② 出産儀礼

妊婦に出産の兆候が表れた時、村の産婆を家に招き、出産の介助をしてもらう。産婆には謝礼金を渡さず、代わりに中国旧暦の正月や祝日、出産から初年の4月11日に行う子供の剃髪儀礼などの時に、パンや肉まんなどで返礼をする。

無事出産を終え、産児が男子であれば、父親が家の仏壇に供物を供え、巨大な香炉台でサンbsangを焚き、法螺貝を吹く。女子であればサンbsangを焚くが、法螺貝は吹かない。また、その後、男女に関係なく無事出産したことへの感謝の気持ちを込めて、村の廟と僧院へ祈りに行く。当村では女の子より男の子を重視し、女子であれば、満月の日に行う披露式も行わない例も多い。また、男の子はチベット仏教僧にもなれるため、大いに喜ぶ。男が生まれても満月祝いの披露式まで、子供が元気に育つようにと、両親が村人に黙っている例も少なくない。

産後1週間あまりは、妊婦と赤ん坊に太陽光を直接浴びることを禁じる習慣がある。また、産後、満月祝いの日まで、隙間風が室内に入らないように工夫し、窓と電球などに赤い紙を貼り、部屋を暗くする。これは赤ん坊の目の保護にも繋がると考えられている。妊婦は布団をたたまず、授乳と食事、トイレ以外は横になり、身体を休める。風には絶対当たってはいけないし、冷たい物にも触ってはいけない。更に、外来の客を断るための魔除けとして、産後直ちに家の正面入口の錠前の隙間に、ネズの枝を刺し、正門前の土の上に一日中、羊や牛の糞などを燃料とした火をもやす。その家と特に関係のない者は、それらを見て出産を知り、訪問を控える。遠方から来た家族や親類縁者でも必ず、家に入る前

にその煙火を浴びてから入る。また、悪霊の侵入を防ぐために、産婦の寝室の入口や枕元に鎌や小刀を置く。通常、姑が家事洗濯、子供の世話などすべての面倒をみることになる。満月祝いの日の披露式の際、訪れた村人や親戚は、妊婦の身体の具合や顔色などを見て姑と嫁の人間関係を評価する。例えば、回復状況や顔色が悪い場合は、姑のマナーが悪いとか、家族関係が良くないと判断され、周りの村人に噂されることになる。産婦の体調を回復させるために、新鮮な羊肉一頭分を用意し、家族とは別に産婦用の料理を作る。一日三食で、朝は加熱したミルクに薄焼きのチベットパンをちぎって作ったあっさり淡白なチャラブ料理で、昼は羊肉のスープと焼きパン、夜は「トウクパ」というチベット式麺類と塩茹での羊肉料理を食べる。

③ 命名

産後一週間以内に父親が一度、村の僧院を訪れ、転生ラマなどの高僧に子供の命名と「ヤングー(g-Yang 'gugs)」或いは「ヤンボ(g-Yang 'bod)」(いずれも、幸運を呼び出すという意味)と呼ばれる儀礼を依頼する。高僧は両親と子供の生年月日や干支などによって、子供の名前と子供の服の襟に縫いつける布の色を決める。また、子供にお札(ふだ)を与え、子供のヤンボ祈禱を行う。漢族と異なりチベット族には、姓がない。名前は大体高僧からつけてもらう。男であればツァンジェ sangs rgyas (仏陀)、ジャムヤン'jam dbyangs (文殊菩薩)、チキョンchos skyong (護法神)、ドルジェ rdo rje (金剛)、シャウ sha bo (山神名)、ユルハyul lha (土地神)、チョルテン mchod rten (仏塔)などがある。女の子であればジョマsgrol ma (ターラ菩薩)、ハモlha mo (女神)、カジョ mkha' 'gro (空行母)などがある。上記のようにチベット仏教の菩薩や法具、あるいは土地神や山神の名前を付けることが多い。

赤ん坊は出産直後、お湯に酒を入れた水で洗い、柔らかい布などで拭く。命名儀礼を行うま

でに身動きできないように柔らかい綿布を巻いておき、産着を着せないままにしておく。高僧から名前をつけてもらい高僧に指定された吉日に、自宅で命名儀礼を行う。儀礼の最中に、親子が台所の竈のわきでサンを焚き、竈に向かい、そこに宿る竈神、家神、土地神などの神々の名前を呼びながら神へ五体投地する。その後、母親が赤ん坊に初めて白い衣服(手作りの白いシャツ)を身につけさせ、子供の名前を三度呼ぶ。

産後1ヶ月の間に子供がひどく泣くなど異常が生じた場合、再び高僧のところへ行き、占ってもらい、改名してもらうことがある。チベット人は一般に乳幼児の時期だけではなく人生の節目に新たな名前を高僧から命名して貰うことが多い。

産後1ヶ月間は、当村の習慣として赤ん坊の生命力が弱いと考えており、健康のため生後毎日、赤ん坊の額に鍋の墨を塗り、黒い印をつける。また、家族は悪霊の侵入を防ぐために、夜間の外出や遅い時間帯の帰宅は控える。万が一、子供に異常が生じた場合、伝統的治療法に従って村の高僧、或いは「モワmo ba」という占星術師に占って貰う。その後、数人の僧侶を自宅に招待し、子供のために読経し、悪霊を追い祓う儀礼を行う。病気をもたらした悪霊を捕らえ、「トルマ」gtor maというツァンパで作られた三角形の人形を村の三叉路に打ち捨てる。

④満月祝い

産後1ヶ月経つと満月祝いを行い、子供の誕生と名前を村人に初めて披露する。村人や親族が訪れ、祝宴を開く。参加者は、鉄の鍋で焼いて作った円形パン(写真2)(直径10cm)3枚と布地、祝儀、子供服などをお祝いの品として持参する。通常、親しい間柄であれば、多くの品を持参することが多い。来客を羊肉と野菜入りのスープと揚げパン、ミルク茶などでもてなす。帰り際に満月祝いの返礼として、訪れた村人に円形パンの半分を渡す。

例えば、前述のYさんの母Wさん(74歳)は出産前後について次のように語った。

「私の場合、8人の子が生まれ、そのうち2人が難産で産後まもなく亡くなった。2人とも男の子だった。当時は病院が少なく、病気になっても、村のチベット伝統医からチベット薬を貰うか、ハワを自宅に呼んで治療を受けていた。でも文革の時は、それすらもできなかった。出産の時も、勿論8人の子すべて産婆に依頼した。その産婆は、既に亡くなっている。当時は今のような病院はなかった。その時は、人民公社の時代で、村人が一緒に労働し、一緒に分配、消費するという時代だったので、出産後、産休も一週間程度しか休んでいないと思う。毎日のように子供を背負い、朝から晩まで生産隊の労働に参加した。労働しないと食糧が貰えないから、毎日過労気味だった。当時は、食糧だけではなく、暖かい衣服も十分ではなかった。家族の服が破れたら、自分の手で何回も縫うのが普通だった。出産後に食べるべき栄養のある羊肉などは、ほとんどなかった。そのため、現在、年をとって関節痛などの病気が多い。1970年代の後半になってから政策も変わった。畑を各家に分配し、生活も徐々に良くなって来た。私の5番目の子が誕生した時、やっと現在のように一ヶ月間休めたと思う。その時は、食糧が十分ではなかったので、満月祝いの日に訪れるほとんどの親類や村人が、円形のパンと布地を贈ってくれた。当時は子供も多かったのが助かった。パンも一週間程度は食べられたし、布地のほとんどは衣類に使用した。昔と比べると今の時代は幸せだよ……。

子供の名づけや病気になった時は、ほとんど、わが僧院のZ氏に依頼した。あのお坊さんは偉いよ。Z氏によるウォッコル村の僧院と村人に対する貢献が大きい。昨年、Z氏が亡くなったから、命名などで村人が困っている。昨年、誕生した孫の名づけは、村の長老J氏(占い師82歳)にお願いし、名づけて貰った」

現在の儀礼では円形パンの代わりに、小麦粉

5kg程度を持参したり、布地の代わりに衣類や祝い金を寄贈するようになってきている。これは円形パンをたくさん貰っても保存に困るし、小麦粉だと好みの料理に調理でき、長期保存もできるからである。また、布地より衣類や祝い金を贈るようになったのは、村の衣服を作る職人が減り、既製の市場販売が増えたためである。さらに、近年では、村人の収入の増加に伴って、人々の観念も変わり、結婚式のように高級ホテルやレストランで満月宴会を設ける例も増加している。

2000年前後までは、子授け祈願が盛んに行われたが、村人の生活の向上と医療の発達に伴い、神々に祈願することへの信仰心が薄れた。フコン祭などの祭祀儀礼も中断したままであり、子授け祈願をするより不妊治療を受ける人が増えた。また、以前は、家で出産する人が多かったが、現在では同仁県の病院で出産する人が増えたため、出産に伴い自宅で行う神々への供養とほら貝を吹く儀礼などは減少している。特に、命名については、元来、チベットではアムドとカム、ウツァンという三つの地域で、それぞれ命名の地域的特徴があり、名前から大体の出身地がわかることがあった。ウォッコル村の場合は、これまで当村で最も信頼のあった重要な高僧Z氏が2014年に亡くなり、現在は遠隔地や同仁地方のロンウォ寺の高僧に命名してもらうようになった。また、インターネットや携帯電話などの通信システムの発達により、インド在住の高僧（例えば、ドライ・ラマ法王）に命名依頼する傾向も増えた。そのため、名前の地域性が薄れつつある。さらに、命名の時に行われていた竈に向かって竈神、家神、土地神などに行う五体投地の儀礼も失われつつある。

5.2 剃髪式

剃髪式は同仁地域でも村によって若干違う。誕生から3年後に盛大に行う村もあるが、ウォッコル村の場合、生後最初の旧暦の4月11日に行う。4月はチベット仏教徒にとって特別な祭日が多

く、特に4月15日は仏陀が誕生、悟りを開き、涅槃に入った記念日であるため、各地の僧侶と年寄りを中心に断食、読経儀礼を行い、羊や魚などを放生する。生まれた日から髪の毛を伸ばしたままにし、生後最初の4月11日に親類縁者が集い、小規模な剃髪儀礼を行う。一般的には父方の祖父によって鋭い小刀で剃髪するが、当地域では50年代から70年代にかけて数多くの方が餓死したため、父方の祖父が不在な家庭も多い。その場合は村の長老が行う。長老が剃髪式を行う場合、一般的にヤンゲーのような祈願経をあげ、子供が丈夫に成長するよう願って行う。髪の毛は最後にまとめて護符とタカラガイとともに子供の衣服に縫い付ける。肉まんや野菜まんなどを作り、産婆や親族の人に贈る。

近年では、病院での出産が増えたが、病院には肉まんなどを送らない。剃髪式も簡素化し、父親が髭剃りで剃髪するようになった。

5.3 成人式

成人式 (skra phab pa) (写真3) は肉体的、社会的な成熟を村人に示す儀礼である。地域によって、儀礼を行う年齢及び時期、儀式次第、髪飾り、衣装や装飾品の選り好みについて差異が見られる。ウォッコル村を含む同仁地域の村々の成人式は女性のみが行う。ウォッコル村の場合はほとんどが17歳の女性で、ナムガン (大晦日) nam gangに行う。農民の財産である小麦や菜種油、家畜などを売り、ツァル (冬用の民族衣装 (写真4) tsha ruとシャム (獺の皮) sram、ゲイラ (夏用の民族衣装 (写真5) gos lwa、ゲラフ (帯) ske raks、ナロン (金の耳飾) rna luag、ゲッジャン (珊瑚などの宝石の首飾り) ske rgyanなどを整える。伝統的には上着の襟 (えり) や袖口 (そでくち) に獺皮をつけ、狐皮の帽子、それに高級な珊瑚や金、銀の装飾品を身につける習慣がある。また、特別な装飾として「ウゴル」或いは「ドン」という豪華な銀の髪飾りなどを身につけて、娘の成人と家の財産を村人にアピール

する習慣があった。中程度の準備をするとして、費用は10万元（150万円相当）ほどかかる。成人式の前夜に、親戚の婦人一人に依頼し、銀の髪飾りをつけるために、髪をすだれ状に編んでもらう（写真6）。

成人式の日、父親はいつものように朝から家の仏壇に供物を供え、香炉台でサン（供物）を焚き、法螺貝を吹く。この日の供物は普段より多く供える。その後、村の廟と僧院へ祈りに行く。僧院の高僧に「ヤンゲー＝幸運を呼び出す」儀式を行ってもらい、すだれ状に髪を結ってもらい、美しく着飾った娘は、最初に家の仏壇に向かって五体投地し、その後、招かれている親族の家に向かう。こうして村民は娘の成人式を知ることになる。この日には村の親戚や友人がお祝いの肉まんや衣類、または祝い金を持って娘の家にお祝いに訪れる。また、年が明け、成人式に娘が正月に親族の各家をまわる時も髪飾りは着けたままにし、各家からは紅包（お年玉）以外に成人式の祝い金を渡す。成人式を済ませると娘は一人前の女性として村人に認められ、自由に恋愛ができ、両親が干渉することはない。

2006年にインドのアンドラ・プラデーシュ州で行われたカーラチャクラ（時輪タントラ）の灌頂儀礼の際、10万人以上、人が集まり、そのうち中国から約1万人のチベット族が参加した¹⁰。ダライ・ラマ法王がスピーチの中で野生動物への愛護と慈悲の心を持つこと、晴れ着に多額の散財をせずに資金を子供の教育費に回すことを提言した。チベット仏教徒にとってダライ・ラマは観音菩薩の化身の存在で、転生ラマの頂点であるため、その影響力は今なお強い。このダライ・ラマのメッセージは、中国本土からインドの儀礼に参加した信者を通じて、中国のチベット人居住地域全土に広がった。

2006年のインドでのダライ・ラマ法王による灌頂儀礼の際、ウォッコル村から5人の村人が参加した。その内の2人は引退したハワ（シャーマン）夫妻である。2015年の聞き取り調査の際、

ハワは家の仏壇から宣伝用ポスター2枚（写真7、8）を取り出しながら、以下のように語った。

「これは法要の際、インド在住のチベット人野生動物愛護団体からもらった動物愛護と精進料理推進に関するポスターだよ。法要の際、会場付近でも数多く貼っており、本土から来たチベット人の特別謁見の機会を設けていたので、その法話の際、法王が、我々チベット本土から来た信者に対して『時代が変わったので、我々の悪い慣習を変えるべきである。チベット仏教徒にもかかわらず、我々チベット人が未だに仏教の教義に反する生贄を行う。また、貧しいのに、お金を貯めて、イスラム系の回教から高額で獺の皮及び豹の皮、狐の皮、象牙、珊瑚、金と銀など購入し、それを財産の象徴として誇りを持って身に付ける。本来は恥ずべきことであることを知らない。我々チベット人の現状と行動を見ると悲しくなり、この世を去りたい』と訴えた。その場にいたチベット人の信者みんなが泣きながら、『法王様よ、長生きしなさい。我々は帰国後、本土のチベット人同胞たちに伝え、直ちに悪い慣習を変えるよう努める』と誓った。私は法要の後、この2枚のポスターをインドから命をかけて故郷に持ってきたよ。帰国後、最初は自分の行動から始めた。訪れた人々にこのポスターを見せて、法王様の法要内容を伝えた。また、積極的に自分が持っていた獺の皮を燃やし、これから自分は愚かな行動をしないと誓った。現在、ほら、法王様のお蔭で孫たちの民族衣装や成人式などに関して全く心配がないでしょう…」

灌頂儀礼直後の中国暦の旧暦2006年の正月の際には、各自が所持している獺などの野生動物の皮を燃やす運動がアムド地区の中心である隆務寺の広場で起こった。これ以後、婚礼の民族衣装は、簡素化されるようになり、成人式の娘を持った両親の経済的負担も大幅に軽減した。この出来事は、ダライ・ラマの影響力を示すものとして注目される。ただし、髪飾りのドンは、今日に至るまで変わらない。このドンは高価な

のでほとんどの場合、知人友人から借りる。成人式は結婚前の準備であり、結婚式の服装と髪飾りなどは、成人式と全く同じである。

5.4 結婚式

ウツァンのラサ・シガツェ方面とカム、アムド或いは農村と牧畜それぞれの地域で行われる結婚形態にはかなり大きな地域差がある。以下で述べるウォツコル村の結婚形態は、アムドの農村のケースである。結婚には紹介（見合い）型と恋愛型の2つのタイプがある。

紹介型は伝統的なもので、主に第三者の仲人と双方の両親あるいは親族、両親の知人などによって本人の意思と関係なく決められる。

両親にとって自分の息子の理想的な結婚相手は、まず、他民族や異教徒ではなく、仏教徒でなければならない。この前提の下、村落内の人間の中で、ユルラシュダク（土地神）とチキョンソンマ（護法神）の信者の家柄であり、かつ3-4世代までさかのぼって父親と血の繋がりが無い人であることが条件となる。そのため、結婚相手の父親の血縁関係も祖先まで遡って調べることがある。また、男女二人の生年月日と干支など両者の相性が合致するかどうかもある。村人の中では、「牛と羊の干支の夫婦は山の争い、犬と龍の干支の夫婦は雷の争い、虎と猿の干支の夫婦は力の争い」という言い伝えがあり、忌避されている。ジュパ（血縁）rgyud paやロウリ（干支）lo risなどの問題がなければ、「ソンチャン」slong changという求婚酒とカダク（形状はスカーフに似た絹で、賓客や高僧に捧げる布片）kha btags、茶葉などを用意し、「ワルワ」bar baという親族の年長者で経験豊富な仲人2～3人を候補の女性の家に送り、婚約を交渉する。女の家族（特に両親）も求婚に応じて男の血縁関係や干支、信仰などを調べることから、結婚の申し出を断る場合もある。双方の両親と家族が同意すれば、婚約用のカダクと酒を受け取り婚約が成立する。両家の間に婚約が成立した場合は、

女の家族からは仲人が持参した婚約酒をもって村の家々を回り、婚約を知らせる。結婚式の日取りは高僧が占いで吉日を決める。吉日は、一般的に大晦日と正月に集中している。結婚式の日、朝4～5時頃に、新郎と花婿の介添え役として従兄弟の一人が「ツァル（冬用民族衣装）」の春着を身に着け、新婦の家に迎えに行く。新婦は母親や親族に髪をすだれ状に編んでもらい、女性用の「ツァル」と「ゲツジャン」（珊瑚などの宝石の首飾り）の装飾品、成人式の時と同じくドンなどで身を飾る。新婦の家族や親族らが新郎を家に出迎え、家の上座である台所の竈に近い場所に座らせ、ミルク茶や肉まん、揚げパンなどを並べる。ただし、新郎と介添え役の二人は食べることはできない。村人や親族の人々が食べさせようと工夫をするが、二人は頑なに遠慮の姿勢を守り通す。新婦の準備ができたなら、親族の若い女性2人が嫁の介添え役として新婦の左右の腕を持ち、ゆっくりと家を出る。台所の出口あたりで新婦が後ろを振り向かず右手で一束の箸を投げる。これは幸運を自宅に残して出るという意味になる。その後、家の庭をゆっくりと3回時計回りで周り、泣きながら正門の方へ向かう。母親も涙を流しながら、娘の名前を愛称で3度呼び、「我が家の幸運を残し、幸せを新郎の家に……」という。

新婦の家から新郎の家までゆっくりと歩きながら新郎の従兄弟が民謡を歌う。歌わないとみんなが動かない。歌ができない場合は、歌の代わりに小銭を周囲の人に払う。そうしなければ、新婦の親族の女性らが歩くのを妨害し、新郎とその介添えの耳を引っぱるからである。それを止めさせるためにも歌を歌い、小銭を払わないといけないのである。このように、新婦の親族は新郎の家の近くまで新婦を見送るが、途中で神廟や僧院、ンガカン（摩尼堂）、仏塔などの近くを通ると、その方向へ向かって五体投地の礼拝を行う。新郎の家に近づくと、新郎の親族や村人が出迎えに来てくれる。その時、新婦の親

族は、新婦を新郎の家族に引き渡して帰宅する。

新郎の家の正門前で村の若者たちが爆竹を鳴らし、年寄りの二人が門前で酒とミルク茶を持ち、それらを撒き散らしながら神々へ捧げる。新郎と新婦がゆっくりと家の正門から中に入る。家の中には僧侶或いは年寄りがあり、彼らを家の中に招き入れる。その日、家の中では一日中、ヤンゲーという「幸運を呼び出す」儀礼を僧侶が行っており、新郎と新婦が家の中に入った後に、親族や村人も家に入って結婚を祝う。新婦がまず、新郎の家の仏壇に五体投地し、家の家神へ祈る。その後、台所に入るが、この時、姑はそのドアの後ろに隠れる。これは今後、嫁とのトラブルを避けるという意味になると言われている。嫁は竈神へ五体投地し、鍋から3杯のミルク茶を容器に入れて竈に置いて祀り、新しく用意された自分の部屋に入って休憩する。親族や村人は、肉まんや衣類、祝い金などを持ってお祝いに来るが、新婦の家族や親族は新郎の家には訪れない。結婚式が行われている新婦の家では、結婚式のお祝いに来た人たちを肉まんやシャキャ（羊肉スープに野菜を入れた料理）sha skyaなどのご馳走でもてなす。

新郎の友人や小、中、高校の同級生、職場の同僚などが爆竹を鳴らしながらお祝いに来る。結婚式に集まった人たち皆で、夜遅くまで料理や酒類、歌などを楽しむ。

新郎が新婦の家族や親族を招待するのは、結婚式の翌日か別の日である。これはチベット語でタプトン（thab ston）という。新婦の家族や親族の人を中心に10人～20人あまりが新郎の家に集まる。新郎の家族が骨付き羊肉や肉まん、野菜炒めなどの料理を用意し、一日中美味しい料理やマンル（民謡）dmangs glu、酒を楽しむ。祝宴をあげた後、帰り際になると、新婦の両親に「ゾルゴ」というチベット服用の布と婚資として5000元～10000元程度の「紅包（祝儀）」を渡す。新郎側は、婚資以外に、新婦の親族に一人あたりに50元～100元あまりとパン、骨付き

羊肉、衣類やカダクなどの贈り物を贈る。後日、今度は、新婦の親族や家族が、新郎の家族や親族を招待し、同じく料理や酒を振る舞い、歌などを楽しむ。この両者の家の往来と両家の祝宴によって、新郎新婦は新たに家族となり、社会的に認められた夫婦となるのである。

恋愛型は以前からないこともなかったが、1990年頃までは紹介型が一般的であり、恋愛型は例外的であった。

2000年前後までは、結婚式は新郎の家で行い、その後2回にわたって互いを招待する形式をとってきたが、最近では、表4に示したように、農業外労働が増加したこと、またそれによって収入が増えたために、高級ホテルやレストランで一括して婚礼を行う例が増加した。近年、男女二人の生年月日と干支など両者の相性が合致するかどうかを問題にすること、廟と僧院へ向けての礼拝なども減少した。

恋愛型が90年代以降、進学率や出稼ぎ労働者の増加に伴い増加した。さらに、成人式と同じく、転生ラマの訓話により、婚礼衣装には動物の毛皮を用いず、婚礼衣装は簡素化されるようになったので、経済的負担も大幅に軽減した。

また、近年の通婚状況は、村内婚が減り、村外のチベット族との結婚が著しく多くなり、周辺の土族や漢族などとの通婚の多様化傾向も見られるようになってきた。表4で示すように、2014年にウォッコル村の30代男性村民合計18人の通婚状況について調査を行ったところ、同仁県以外の他村から嫁いできたチベット族は14人で、同県内の他村からの土族は2人、他県からの漢族は2人であり、圧倒的にチベット族との婚姻が多いことが明らかになった。また、表5で示したように、ウォッコル村の20代から50代までの村外から婚入した既婚者男女合計203人について調べたところ、嫁入りした周辺のチベット族が96人で、同村内の住民同士の結婚は76人、同県内の土族は19人、周辺の漢族は4人、イスラム系回族は2人、甘粛省からの漢族の婚入りは6人であ

表4 30代男性村民の通婚状況

名前	年齢	民族	職業	結婚時期	式の開催地	妻の民族	妻の出身	子供
TX	30代	土族	農民	1997	自宅	蔵族	他村	男2人
CR	30代	蔵族	農民	1998	自宅	蔵族	他村	女2人
DJ	30代	土族	絵師	2009	レストラン	蔵族	他村	女1人、男1人
LZ	30代	土族	農民	1998	自宅	蔵族	他村	女3人
NM	30代	蔵族	農民	1999	自宅	蔵族	他村	女2人
DP	30代	土族	運転手	1999	自宅	蔵族	他村	女1人、男1人
LQ	30代	土族	絵師	1996	自宅	土族	同村	女1人、男1人
XB	30代	土族	絵師	2000	自宅	土族	同村	男1人
JX	30代	蔵族	伝統医師	2003	自宅	蔵族	他村	女1人、男1人
XW	30代	土族	農民	2003	自宅	蔵族	他村	女2人、
KT	30代	土族	農民	1999	自宅	土族	他村	女3人
CR	30	蔵族	農民	1999	自宅	蔵族	他村	女2人
YB	30代	蔵族	教師	2008	レストラン	土族	他村	女1人、男1人
RQ	30代	蔵族	教師	2007	レストラン	蔵族	他村	女1人、男1人
QP	30代	蔵族	教師	2010	レストラン	漢族	他県	男1人
AK	30代	土族	公務員	2011	レストラン	漢族	他県	女1人
DL	30代	蔵族	公務員	2013	レストラン	蔵族	他村	女1人
DK	30代	土族	教師	2014	レストラン	蔵族	他村	男1人

註：この原稿では主に筆者と同年代の村人の事例を取り上げる。

表5 ヲツコル村に住む20～50代の婚入した配偶者についての調査

民族	嫁・娘婿	人数
周辺のチベット族	嫁	96人
同村住民同士	嫁	76人
同仁県の土族	嫁	19人
甘肅省臨夏県の漢族	娘婿	6人
周辺の漢族	嫁	4人
回族	嫁	2人

る。明らかに同一行政村内からの嫁入りより、チベット族の嫁入りが多く、また異民族や異宗教との通婚など多様化がますます進んでいる。

5.5 積徳（善行）儀礼

積徳儀礼はチベット語で「チchos」或いは「ゲワdge ba」と言う。積徳儀礼は大別して、ソン

チ（現世の善行）gson chosとシュチ（死後の善行）shi chosの2種類がある。かつて、村人の寿命が短かったため、積徳儀礼は村人が50歳を過ぎると誰でも行うべき儀礼といわれてきた。この儀礼は「死の準備」と称されるが、危篤と判断された場合や急死した場合には、親族か遺族が代行して積徳儀礼を行う必要がある。

積徳儀礼の当日の朝食はミルク茶、ツァンパ、揚げパン（写真9）などで、夕食は牛肉や羊肉のスープに野菜を入れたチベット風うどんの「トゥクパthug pa」（写真10）を食べる。儀礼は必ず食前に行い、出席した村人の男女とも皆食事の前に感謝の気持ちを込めて一緒にチベット仏教経典を読経し、神々に祈禱する。儀礼を主催する家族や親族が費用を全額負担し、その家族や親族が中心にソンの準備をおこなう。

積徳儀礼は、主に村の僧院（写真11）で行われ、

僧侶と村人が自発的に手伝いに来る。まず、一日目は食材などを家から僧院の食堂まで運び、練った小麦粉を練り発酵させる。二日目は揚げパンを作り、すべての食材の準備をする。三日目は積徳儀礼を行う主人やその家族・親族は、僧院の本堂の仏壇や護法神堂の祭壇にバター灯明や花、水など供物を供え、積徳儀礼を行う。また、儀礼に参加した僧侶と村人全員に朝晩2食のごちそうを提供するほか、村内の各家に、各家族の人数分の揚げパンとバター、金銭を布施する。僧侶らは1日中、施主の健康と長寿、その家の先祖冥福などの祈祷儀礼を行う。

近年、村は富裕層と貧困層に階層分化しつつあり、金持ちの家では積徳儀礼用のバターや肉、費用などの量を増やして派手に行く傾向が強い。他方で、貧しい人々は経済的理由から、小規模な儀礼に留まるために、社会的面目を失うことが多い。積徳儀礼は、50歳になった人は必ず行う儀礼であるため、経済力の豊かさや、それによって伴う社会的評価に深く関わっている。

2000年頃に、村長や長老らが集まり、布施用のバターや肉、出費などについて規則を作って貧富の格差の減少をはかり、村人の中の融和を図った。この儀礼は2010年前後までは50歳以降の人が中心に行くことが多かったが、近年では、収入の増加と長老会による新たな規定の変化により、40歳程度にまで実施年齢が下がっている。また、近年、村人の間でも食の変化が顕著であり、儀礼の間に提供される料理の中にも、メニューの変化が垣間見られる。デイ'bras（写真12）という米のお粥に葡萄とナツメ、バターなどを入れた肉のない料理が出されるようになった。最近では、精進料理が積徳儀礼に出される傾向にある。

5.6 60歳の祝いと80歳の祝い

アムド地域ではチベット暦よりも中国の旧暦¹¹⁾の影響が強く、ほとんどの成人式や結婚式、長寿の祝いなどの儀礼は旧正月に集中している。60

歳の祝い（drug cure ston）は男性のみで、80歳の祝い（gya ston）は男女とも行う。これはチベットでは男性のほうが女性¹²⁾より社会的地位が高く、男性より女性の寿命が長いためであろう。

また、村人の話によると、昔は村人の平均寿命が短く、80歳の祝いを祝う老人は極めて少なかったが、近年、生活水準の向上や医療の発展により、80歳の祝いを祝う老人が増えた。しかし、村人であれば誰でも必ず行われなければならないという決まりはない。ソチのように長寿の祝いも人生にとって一つの積徳儀礼でもあるため、村人への布施と功德を積む良い機会だという考え方が強い。

60歳の祝いと80歳の祝いの内容と形式は全く同じである。長寿祝いをを行う場合、家族が出費のほとんどを負担し、春節の準備と共に長寿の祝い用の食材や酒類、タバコなどの準備を始める。長寿祝いの日取りを決める場合、事前に余裕を持って長老会や村長などへ長寿祝いをを行う意向を伝え、長老会に日程の選考を依頼する。ほとんどの場合は80歳の祝いがあれば、それを優先し、春節の3日から始めるが、長寿祝いをを行う人数が多い場合は春節の2日から始める。同日に2名の祝いをすることは避けるからである。

長寿祝いの前日に、親族の人を中心に村人が儀礼の準備を手伝いにやってくる。ほとんどの場合は自分の家の庭（写真13）で行うが、家の広さなどによって場所は異なる。参加する村人全員がその家に入らないようであれば、隣家、或いは村の廟などを使用する場合もある。

儀礼が行われる日の朝、儀礼を行う家族の中から代表一人が各家を回り、長寿祝いを知らせる。訪問を受けたとき、各家からは家族の代表として主婦らが長寿を祝われる老人に対する贈答品として肉まんや金銭などを渡す。午前中は各家から祝いに来た主婦らに「シャキヤ」という羊肉のスープ料理と肉まんなどをご馳走するが、長寿祝いの儀式は正式には正午から始まる。男性を中心に爆竹を鳴らしながら、男性ら一同

がその家へ入り、最初は五体投地の礼拝を行う。その後、年の順に列を作って並んで座るが、女性には特別に席を設けない。女性達は観客として午後になると徐々にその家の中に入ることができる。手伝いに来た若者らが事前に用意していたミルク茶を注ぎ、村人らはお茶を飲む前にみな一緒にマニ真言を唱え（写真13）、その家や老人の更なる長寿を祈願する。そして親族の人を中心に村人が長寿の老人にカダクと絹布（長さ3～4メートル、幅1メートル）などを首や肩にかける。その後、事前に用意していた「トンシャ」ston shaという、一頭のまま解体せず、まるごと大きな鍋で煮た羊肉の前で、一人の男性が左手に酒を持ち、肩に一枚のカダクをかけ、右手で神々の名前を唱え、村の歴史を語り、すべての神々へ酒とミルク茶を捧げながら祝辞の「トンシャフ」ston bshadを唱える。祝辞が終わると、その肉を一口ずつ分けてみんなで食べる。民謡が始まると酒や野菜炒めなどの料理を食べながら宴会を楽しむ。数人の僧侶も参加するが、僧侶は俗人の活動に参加せず、家の一ヶ所でヤングー（長寿と幸運を呼び込む）儀礼を行う。午後5時頃になると最初に僧侶らが集まった村人に向かって小銭を撒く。その後、家の屋上に用意しておいたリングや梨、ナツメ、みかんなどの果物を屋上から集まった村人に向かって撒く。女性と子供を含む村人全員はそれを拾い、楽しみながら獲得した果物を持って帰宅するが、男性は酒を飲み、民謡と踊りなどを楽しみながら夜遅くまで宴会を続ける。

近年、この儀礼は旧正月の吉日に限定せず、夏や秋の時期、週末などに行うようになってきた。冬より夏と秋のほうが果物や調理用の野菜が豊富にあるし、値段も安いのである。場所も民家だけではなく、廟の前の広場などにツォクルという大きなテントを張って行うようになった。果物と餡なども屋根から撒くことをやめ、バランスをはかって人数分を分配するように変化してきた。

5.7 葬儀

チベット人は死後、人の霊魂は中有（死から次の生を受けるまでの期間）に入り、49日後に生まれ変わると信じている。そのため、死後、一連の宗教的儀礼を行うのがチベット地域の文化の特徴である。この点、日本人が四十九日を今生と来世との中間と信じるのと類似していると言えるかもしれない。いずれも仏教から来た習慣と思われる。葬儀の中で行われる死体処理は鳥葬、火葬、土葬、水葬などであり、地域や死者の年齢（未成年者は水葬）、身分（高僧は仏塔に入れる）によって異なる。ウォッコル村の場合は鳥葬場と禿鷲がないため、ほとんどの場合は火葬と土葬、水葬である。これら全ての形式は、各々の家のしきたり、転生ラマの占いによる指示によって決められる。死者が出た時、家族は速やかに村の僧院の高僧に知らせる。僧侶は死亡した日と死者の干支などを元に占い、葬儀の方法と葬儀の日程などを決める。2014年までは当村寺院の高僧Z氏によって決められていたが、現在はその高僧が亡くなり、ほとんどの場合は隆務寺の転生ラマに依頼する。

正式な葬儀を始める前に、僧侶を家に招き念仏儀礼を行う。村落内では昔ながらの相互扶助の習慣があり、親族や村人が遺族に対する共感の気持ちを抱きながら弔問や自主的に手伝いに来る。これに関してはチベットでは「祝いの時は招待すべき、苦しみの時は訪ねるべき」ということわざがある。また、長老や村長などの数人が遺族の代表としてレプコンの大寺、隆務寺を訪れ、転生ラマなどの高僧を招く。転生ラマは遺体のそばで「ポワ」（解脱）経を唱え、儀礼を行う。転生ラマはアムド・チベット語で「ネンゴラマ」（枕の転生ラマ）nye mgon bla maとも言われ、村人は日常的にその転生ラマを尊敬しており、正月や祝日などの重要な日になると、バターや小麦などの供物と金銭を積極的に布施する。転生ラマは、死後のより良い転生先を導いてもらうために、村人にとっては不可欠の存

在である。

葬儀の最終日は村人にとって、死者との最後の別れであるため、葬儀の中で最も重要な日である。朝6時頃、村人は遺族の家を訪れ、出棺の準備をする。村の男性だけが全員、遺族の墓地まで行って故人を送る。棺は亡くなった当日に村大工が木材で坐棺を作る。遺体を入れた棺を運ぶ時は、棺を綺麗な布、シルク、カダクなどで梱包し、2本の棒を棺の両側に結びつけ、村の青年たちが4人で担ぎ、交代で墓地まで運ぶ。土葬の場合はそのまま土に埋めるが、火葬の場合はその棺を解体し、その木材を薪として燃やす。前もって墓地に火葬台を設けておき、僧侶らが読経する中、薬草と穀物、溶かしたバターと共に遺体を燃やす。ジュンサフ（護摩供養）sbyin sregとも呼ばれる火葬は、神仏への供物として功德にもなると考えている。火葬の3日後、遺族や村人が故人の骨を拾って土に埋めるか、粘土に混ぜて「ツァツァ」という仏像を作って巡礼のとき持参して聖地に置くか、或いはその骨粉を保管し、別な機会にラサのヤルルン・ツァンポ河に流すといった方法によって、故人を弔う。葬儀は一般に2～4日間で終わる。

死後7日間を一つの節目として数え、最初の7日が経った時、遺族は僧侶や村の各家へ7枚の揚げパンやバターなどを配り、布施と積徳儀礼を行い、死者が輪廻から解脱または、より良い再生ができるよう祈る。35日と49日目に、遺族は再び僧院の僧侶全員を家に招待し、トンチョ（千供）stong mchodという念仏儀礼を行ってもらう。主に阿弥陀仏のトンチョ或いはターラ菩薩のトンチョ念仏儀礼を行う。遺族や親族は、その日、一日中仏壇に向かって千のバター灯明と千の線香、千の花、千の清水を供え、五体投地を千回しなければいけない。喪中の49日間、遺族中には洗顔、髭剃り、整髪を控え、髪をぼさぼさに乱したままにいる者もある。また、遺族は喪に服している一年間、結婚式や誕生儀礼、歌舞、飲酒、祭礼などへの参加も控えなければなら

い。3年の間、毎年、命日に僧侶らを自宅に招待し、トンチョ儀礼を行ってもらう。

ウォッコル村では近年、チベット仏教の復興運動により土葬が減り、火葬が増えつつある。これまで、「ドフチュ (sdug chu)」と呼ばれる、亡くなった人の親族や友人らが故人の名前を呼び、大声で生前の怨念など言いながら泣く習慣があったが、転生ラマの訓話によって、遺族は泣く代わりに読経するようになった。また、近年、出稼ぎ労働や進学等で村を離れる人が多く、遺体を担いで運ぶ若者の人数が減少しており、車やトラックで遺体を運ぶケースが増加している。

6. おわりに

本稿では、調査地のウォッコル村における誕生、剃髪、成人、結婚、長寿儀礼、葬儀などの人生儀礼を詳細に記述し、儀礼の全体像を見てきた。先行研究で取り上げたネパールにおける石井溥の研究では、ヒマラヤのチベット文化圏の人生儀礼について、ボン教徒の間では、死の儀礼では宗教色は濃いだが、それ以外では極めて薄いと指摘している。ウォッコル村の場合は、宗教的要素が人生儀礼の各段階で様々に関わっており、宗教的色彩は伝統的に人生儀礼の各段階において色濃く見られる。

服部範子はヒマラヤ山岳地帯のチベット仏教徒の人生儀礼について、チベット仏教色が強く、20世紀以降の近代化によって、人々の生活は急速に変化しつつあるが、仏教的伝統慣習は姿を変えて残っていると述べている。本稿で取り上げたウォッコル村の場合、チベット仏教色のみならず、自然崇拜的な要素も人生儀礼において見受けられ、この双方の宗教的要素が共存し、人々の人生儀礼の隅々に宗教が関わって来たことが明らかになった。

しかし、近年、伝統的な人生儀礼のあり方は変化を見せている。その最も大きな要因として、①近年、中国社会で生じている経済発展と、②2000年以降のチベット仏教復興運動の影響が考

えられる。

ウォッコル村の人生儀礼は中国の改革開放政策と2000年以降の政府の「西部大開発」プロジェクトの実施などの市場経済の浸透という経済生活の変化を受けてかなり簡素化してきた。結婚式は、新郎新婦の各家で2回にわたって互いを招待する形式で行ってきたが、現在は高級ホテルやレストランで一括して行うように変わった。それに伴い民謡を歌う時間も短縮された。人生儀礼で贈られる祝いの品も、自家製から既製品や金銭になった。

ウォッコル村民は伝統的に山神、土地神、竈神、家の守り神などの神々や精霊などの超自然的存在の影響を受けながら、人生の節目で行われる儀礼やタブーなどに注意を払ってきた。特に誕生儀礼の場合は赤ん坊の生命力が弱いと考え、丈夫に育つための悪霊祓いや魔よけなどの儀礼が多かった。しかし、近年、経済発展と医療の充実などの人々の生活条件の向上に伴い、人々の自然に対する認識や神霊に対する信仰が薄れ、それらの神々の儀礼はかつてのように頻繁には行われなくなった。

以上は、経済的变化にともなう儀礼の簡素化と言えるが、伝統的民間信仰への依存が弱まっている側面も観察される。

他方、宗教的要素に関しては、自然崇拜よりチベット仏教的色彩が濃くなっていると指摘できる。これは主にダライ・ラマ法王による訓話の影響が強い。その訓話は贅沢を戒める意味合いもあり、儀礼の簡素化も促したが、殺生を禁ずるチベット仏教に沿ったものに改めよという意味合いのもたらした影響が非常に大きかった。それによって、2006年以降の10年間に、種々の変化が生じた。

具体的には、成人式や結婚式などの民族衣装には獺などの野生動物の皮を飾らなくなり、経済的負担が軽減した。また、積徳儀礼などの時、提供される料理も精進料理に変わった。さらに、葬儀も土葬より火葬が増え、遺族の泣く習慣を

改め、代わりに読経するようになった。

このような変化については、チベット仏教の影響が強いとされるブータン王国でも、宮本が指摘するように、近年、仏教高僧の説法により「屠殺忌避、殺生は現世における最大の罪」とされ、一般の人々が肉食や殺生を避けるようになったという。このチベット仏教の影響が強くなったという変化は、ほぼチベット地域全体において見られるが、アムドのレプコン地域において観察すると、他の周辺村落よりも、ウォッコル村において顕著であるという特徴が指摘できる。この点を理解するにあたって、ウォッコル村民をめぐる民族的アイデンティティの側面を考慮する必要がある。

ウォッコル村の人々は、中国政府が1950年代に実施した「民族識別工作」の結果、主に言語によって公式には「土族」とされた。しかし、それ以前は、宗教と風俗慣習などは周辺のチベット族とあまり変わらなかったため、民族的帰属感やあり方が、民族識別以降とは異なっていたと考えられる。

彼らはモンゴル系の言葉を話し、周辺のチベット族とは異なっている。元来、彼らは周辺のチベット族とは異なる言葉を話しており、チベット族から「ドルド」と呼ばれ、区別されてきた。しかし、「民族識別工作」以前は、地域内で同じチベット仏教を信仰する人々であり、チベット仏教で重要とされる仏画の制作を「ドルド」の人々が担っていたこともあり、チベット族と彼らとの境界は曖昧であり、「ドルド」はチベット族とは異なる言語を話す、同じチベット仏教徒として一体感も有していたと思われる。民族識別によって「土族」という民族集団として確定したために、そのような集団間の境界感覚に変化が生じたと考えられる。

2006年正月に野生動物の皮を飾る習慣を止め、所持した皮革を燃やす運動が勃興したときは、ウォッコル村の村人は、周辺のチベット族のように積極的であった。また、2010年にウォッコ

ル村出身の高僧がインドから帰国し、チベット仏教の復興運動を熱心に行ったときは、周辺のチベット族村に比べさらに大きく僧院を拡張し、村人の積徳儀礼と長寿儀礼の内容を変え、殺生を差し控えるようにもなった。加えて、高僧の介入により、自然崇拜的要素の大きかった葬儀を改め、仏教的要素をより多く取り入れたものに変えている。また年中行事など集会の際、現地の高僧や村の知識人などによる訓話が繰り返されることによって、村人は仏教的戒律を遵守するようになっていく。

ウォッコル村においてチベット仏教的要素が顕著に強められている変化は、「ドルド」の「我らはチベット族である」という帰属意識が仏教復興運動とともに強くなったためとみられる。民族識別で土族というレッテルを貼られた村人は、周辺チベット族からの「ドルド」に対する微妙な差別行為を絶えず気にしていた。これを克服するために「チベット族への帰属意識」がことさらに強化され、そのことが儀礼の変化との間で相互に作用してきたと考えられる。儀礼の変化は、アイデンティティ意識の変化を示しているともいえる。元来、「ドルド」と呼ばれてきた人びとには「自分はチベット族である」という意識があり、国家の民族政策や近年の社会経済の変化のなかで、それが強化されたと考えられる。

なお、儀礼の変化にかかわる要因としては、経済的状況や宗教や民族意識にかかわる問題のほかにも、村民の民族構成の変化にも注目しなければならない。それは結婚の変化によって生じている。市場経済の浸透とともに、人々の交流範囲が拡大し、婚姻関係は村内婚から他村との婚姻へ、「ドルド」間から民族を越えて結ばれる関係へと変化した。上述したように、以前は圧倒的にドルドで構成されていた村に、婚姻によってチベット族など他の民族が加わるようになった。この民族構成の変化に伴い、ますます言語や儀礼などが変化することが予想されるが、

これは今後の課題としたい。

注

- 1) 本文中のチベット語の語彙や固有名詞について、原則として現地で使われているアムドチベット語の発音に近い形でカタカナ表記とワイリー(wylie)によるラテン文字の転写方式で併記する。
- 2) 好酷网 藏语与佛典 <http://www.haokoo.com/else/4497800.html> (2016.11.10検索)
- 3) レプコンとは現在の青海省黄南藏族自治州同仁県域を指すチベット語であるが、1949年の革命の前はその領域は今の同仁県を超え、今の沢庫県全域と尖札県、循化サラル族自治県の一部を含んでいた。現在は同仁県を指す用語で、中国語の当て字として「熱貢」として表記する。この地域で発達してきたチベット仏教美術品と工芸品のタンカ(仏画)など「熱貢芸術」の製作地としてよく知られる。
- 4) 「チベット文化圏」とは、チベット自治区近隣省(青海・甘粛・四川・雲南)、インドやネパールのヒマラヤ南麓、ブータンなど、チベット高原を含めたその周辺のエリアのことを指す。アリア系民族地域であってもチベット仏教を信仰し、民族の歴史と文化が共通の地域である。
- 5) 調査者は現地出身であり、大学院に入学以来、主に夏休みと春休みの間に5回にわたって計9ヶ月間のフィールド調査を実施した。主に現地での参与観察と村人への聞き取り調査を行い、村落内部の視点で記述する立場から研究を行った。具体的には2013/7/19～2013/8/31；2014/1/28～2014/2/24；2014/7/10～2014/9/10；2015/1/30～2015/3/19；2015/7/23～2015/9/23。
- 6) 中国の民族識別の4つのメルクマールとは①共通の言語、②同一の生活区域、③同一の生業経済、④同一のアイデンティティである。
- 7) マパチベット族の部族で、新中国成立する前に既に存在した部族制で、レプコン地域は伝統的な行政区分として「ロンウォ部族」及び「マパ部族」、「四寨子(土族)部族」など12の部族で構成されている。また、各部族は7～9の村で構成しており、各部族にはその部族の首領がいた。その頂点の統治者はレプコン地方で最大な寺院(ロンウォゴンパ)のシャル転生ラマとロンウォナンツォ首領の「政教合一政権」である。
- 8) 村の委員会の登録上の実際の人口は1350人であり、主に村人の就職や大学へ入学などにより戸籍を転出し、現今の同仁県公安局保安鎮派出所

の在籍登録731人であるが、公務員などの職を持つ人でも村落内に家庭を持ち、村の行事などにも参加する。

- 9) 同仁県の土族語は正書法が確定していないため、本稿ではアルファベット表記をしない。
- 10) Webサイト「チベット式 チベットの今、そして深層」http://tibet.cocolog-nifty.com/blog_tibet/2006/02/_0f49.html (2014.5.6検索)。
- 11) アムドとカムのチベット地域では、清末に川滇辺境大臣の趙爾豊がこの地域で実施した漢化政策によりチベット暦を廃し、旧暦で行われるようになったという。
- 12) 彼らの日常生活の中でも、ほとんど場合、男性は家事などの手伝いをしない、農業の仕事以外に子育ておよび老人の世話、1日三食の料理の支度などは女性の仕事である。また、60歳の年祝いは男性のみで、80歳の年祝いは男女ともに行う。
- 13) 写真8のポスター内容は「法王の長寿と世界の平和がより実るため、男女と僧俗を問わず、肉食を控え、精進料理を推進するように。一動物自由実現協会より」。

付記

本稿は平成28年度「公益財団法人三島海雲財団」の第54回学術研究奨励金「中国青海省におけるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容に関する人類学的研究」の研究成果の一部である。

参考文献

チベット語

- dGe 'dun dpal bzang, Chu skyes
2007 *Reb gong yul skor zin tho*. Lan gru: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. (更登華蔵『漫話熱貢』蘭州: 甘肅民族出版社)
- 'Jam dbyangs grags pa, rgya bza'i dge bshes
2010 *reb kong rus mdzod lta ba mkha' khyab phyogs bral: mi rigs dpe skrun khang*. (嘉央周華『熱貢族譜』北京: 人民出版社)
- 'Jigs med theg mchog
1988 *Rong bo dgon chen gyi gdan rabs*. Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang (吉迈特却『隆务寺志』西寧: 青海民族出版社)

'Jigs med bsam grub (Reb gong pa)

- 2013 *mDo smd reb gong lo rgyus chen mo ngo mtshar gtam gyi bang mdzod*. Pe cin mi rigs dpe skrun khang (吉美桑珠『安多熱貢歷史広説』北京: 人民出版社)

br'Tson 'grus rab rgyas (ed.)

- 2007 *Krung go bod kyi rig gnas sgyu rtsal kun 'dus zhal thang chen mo'i rnam bshad mthong grol kun gsal me long*. Pe cin: Mi rigs dpe skrun khang. (宗者拉傑(編)『中国藏族文化芸術彩絵大観図説明鏡』北京: 民族出版社)

sha bo bad+ma rgyal

- 2007 *bod spyi'i lo rgyus dang dus rabs gcig gi ring byung ba'i lo rgyus gnad chen 'ga' phyogs gcig tu gsal bor bkod pa shel dkar me long zhes bya ba bzhugs*

Tshe dbang rdo rje

- 2009 *Reb gong rig gnas sgyu rtsal zhib 'jug*. Lan gru: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. (才項多傑『熱貢文化芸術研究』蘭州: 甘肅民族出版社)

日本語

阿部治平

- 2012 『チベット高原の片隅で』 連合出版。

石井 溥

- 1999 「人生儀礼の比較研究—ボン教徒の人生儀礼と周辺諸民族の人生儀礼」長野泰彦編『チベット文化域におけるボン教文化の研究』pp. 105-122、国立民族学博物館。

江渕一公

- 2000 『文化人類学—伝統と現代』放送大学教育振興会。

小野田俊蔵

- 1993 「チベットにおける葬送儀礼」『佛教大学総合研究所紀要 東西の死生観』佛教大学総合研究所(別冊2): 205-213。

喬旦加布

- 2012 「同仁県ワッコル村におけるルロ祭とその歴史的背景」『北海道大学文学研究科研究論集』12: 103-136。
- 2014 「チベット・アムド地域におけるルロ祭とその社会的意義について—ワッコル村の事例から」『日本西蔵学会々報』60: 103-121。

- 2015 「チベット・アムド地域におけるシャーマンの職能者「ハワ (lha ba)」についての考察—レプコン・ウォッコル村を中心に」『日本西蔵学会々報』61: 61-74。
- 2016 「レプコン芸術の無形文化遺産登録とその後の動態—中国青海省同仁県における考察」『国立民族学博物館研究調査報告』136: 203-223。
- 長野禎子
2008 「チベットにおける「ヤンを呼ぶ」儀礼」『四天王寺大学紀要』46: 433-463。
- 宮本万里
2014 「現代ブータンにおける屠畜と仏教—殺生戒・肉食・放生からみる「屠畜人」の現在について」『ヒマラヤ学誌』15: 72-81。
- 立川武蔵
1991 『講座仏教の受容と変容〈3〉 チベット・ネパール編』佼成出版社。
- 服部範子
2011 「ヒマラヤの山岳地帯における人々の生活と一生—チベット文化圏を中心に」『兵庫教育大学研究紀要』39: 191-201。
- 中国語
安世興
1984 「簡論藏族的喪葬与禁忌」『民族研究』(3)。
- 白君
2013 「安多藏族伝統婚姻形成的変遷及成因」『青海民族大学学報』(1)。
- 羊錯
2015 「吾屯土族婚姻礼俗述論」『民族論壇』(5)。
- 悠憐
1996 「青海藏族喪葬文化」『青海民族研究』(4)。
- 黄南藏族自治州誌編纂委員会 編
1999 『黄南藏族自治州誌』甘肅人民出版社。
- 黄南藏族自治州概況編写組 編
2008 『黄南藏族自治州概況』民族出版社。
- 劉軍君
2015 「成人式与婚姻規制的建構—青海貴徳藏族戴天頭の考察」『北方民族大学学報』。
- 馬成俊 編
2003 『神秘的熱貢文化』文化芸術出版社。
- 青海省誌編集委員会 編
1961 『青海歴史紀要』青海人民出版社。
- 青海省誌編集委員会 編
1987 『青海歴史紀要』青海人民出版社。
- 青海省民委少数民族古籍整理規劃辦公室 編
1989 『青海地方旧志五種』青海人民出版社。



写真1 フコン祭の時の子宝を授かる儀礼



写真2 満月儀礼などに使うパン



写真3 ワォッコル村の成人式



写真4 同仁県土族の冬用衣装 成人式



写真5 同仁県土族の夏用民族衣装

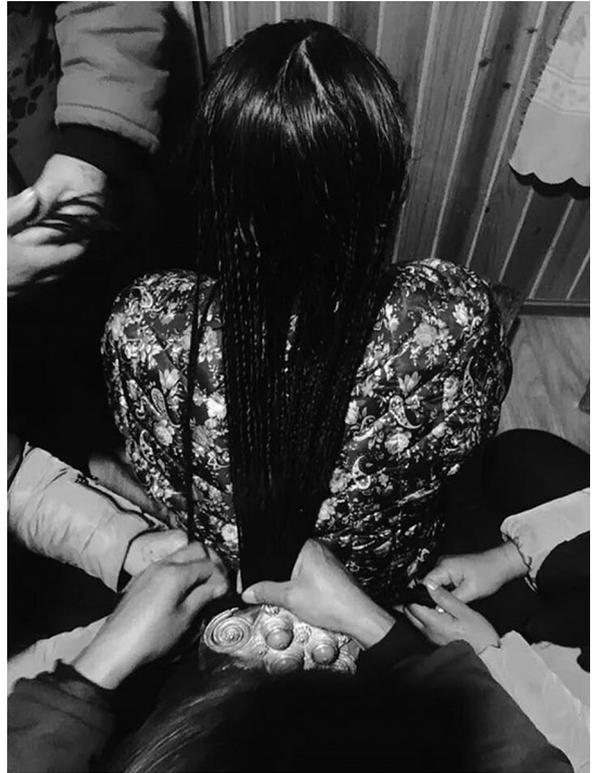


写真6 親戚の婦人が髪をすだれ状に編む



写真7 野生動物保護のポスター



写真8 精進料理推進ポスター



写真9 積徳儀礼と葬儀で使う揚げパン



写真10 積徳儀礼用チベット風うどん



写真11 僧院でご馳走する積徳儀礼

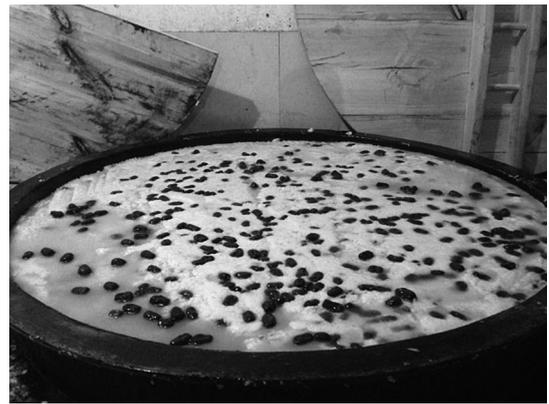


写真12 積徳儀礼用ダイ 精進料理



写真13 正月の長寿儀礼

The Changes to the Rite of Passage in the Amdo Area of Tibet:

A Case Study in Bod Skor Village

Qiaodanjiabu

Department of Regional Studies,
School of Cultural and Social Studies,
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

The purpose of this paper is to describe and discuss the changes to the “rite of passage” in Bod Skor Village, in the Amdo area of Tibet i.e. Huangnan Tibetan Autonomous Prefecture, Qinghai province, China.

Recently, there has been a remarkable renaissance of Buddhist belief in the Amdo area of Tibet, which also impacts on local folk beliefs. I have conducted research on the yearly grand harvest rituals, such as the Klu Rol Festival in Bod Skor Village, and demonstrated that the details of rituals, which are seen as important in local society, have transformed. This paper shows that, as well as these yearly rituals, individuals’ rites of passage have also been greatly altered.

The paper comes to two main conclusions. First, the rites of passage have been affected by the renaissance of Tibetan Buddhism in ways such as increased abstention from killing, a change in the ritual food toward Buddhist cuisine, and also alterations to the adornments used for the initiation rite. Second, along with the transformation of ritual, there has also been a change to the identity of people in Bod Skor Village, those called *Dordo* by other Tibetans and identified as *Tu* by the Chinese government, with their ethnic consciousness of themselves as Tibetans now strengthened.

This paper aims to promote a better understanding of cultural transformation in Amdo, Tibet by showing it at the micro-level and analyzing it.

Key words: Tibetan, Amdo, Bod Skor Village, Rite of Passage, transformation